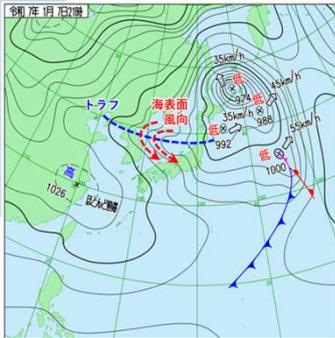


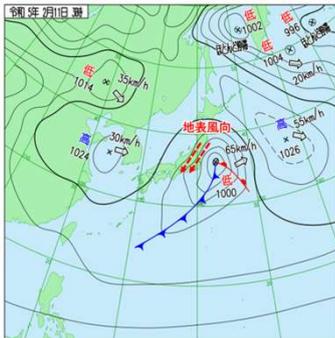
JPCZが太平洋側に？南岸低気圧じゃない関東の雪

VOL.19[2026.2]

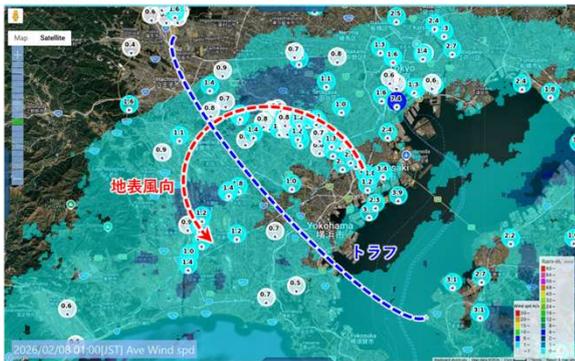
2026年2月7日夜から翌日にかけて、雪が珍しい関東平野でもまとまった積雪となりました。栃木県宇都宮市で15cm、茨城県つくば市で13cmに達したほか、関東南部首都圏エリアの東京都千代田区、神奈川県横浜市、千葉県千葉市でも、いずれも5cmの最大積雪が記録されました。関東の雪といえば「南岸低気圧」が定番ですが、今回はそれとは違う、少し珍しいパターンだったようです。



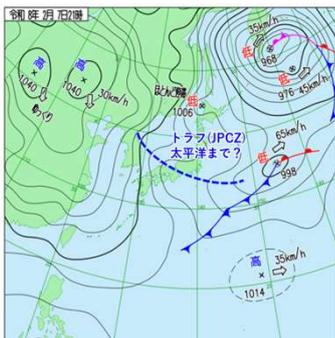
【図1】
2025年1月7日21時
JPCZ発生時
地上天気図



【図2】
2023年2月11日3時
南岸低気圧通過時
地上天気図



【図3】2026年2月8日1時 POTEKA地上平均風速分布



【図4】
2026年2月7日21時
地上天気図

近年、冬の深刻な気象災害を招く要因として「JPCZ（日本海寒帯気団収束帯）」が有名になってきています。

【図1】はJPCZ発生時の典型的な気圧配置です。中国大陸から吹くの上空の季節風は、朝鮮半島北部の山脈によって二分されたあと、日本海上で再び合流（収束）することで、青点線で示した気圧のトラフが形成されます。このラインが日本海側に到達すると、局地的な豪雪を引き起こすのが特徴です。なお、この地上天気図の場合は、地表（海表面）付近では等圧線に沿って逆コの字（赤点線）のような風が吹いていたとみられます。

一方、【図2】は主に関東北部で積雪をもたらした南岸低気圧の典型的な天気図となります。南岸低気圧では、等圧線が関東平野を北東から南西に走るのが一般的です。この時の地表付近では、赤点線で示したように、等圧線に沿って北東からの風が一様に吹きつける状況になると考えられます。

では、今回の積雪時、地表付近の風はどう動いていたのでしょうか。関東南部のPOTEKA地上稠密観測網のデータで確認してみました。【図3】は、東京・横浜・千葉などで雪が強く降り始め出した8日1時頃のPOTEKA平均風速の分布です。多くの地点が観測高さ1.5mであり、地表面摩擦の影響も含まれますが、川崎市周辺のPOTEKA密集エリアを見ると、逆コの字（赤点線）の風の流れが見えないでしょうか？青点線域に気圧のトラフがあり、その周辺で局地的に雪が強まっていた可能性が考えられます。また、7日21時の地上天気図【図4】を見ると、関東南岸に明瞭な南岸低気圧は存在せず、むしろ日本海側からのトラフ（JPCZ？）が列島を越えて関東南岸にまで伸びてきている状況でした。このトラフが通過することにより、関東に積雪がもたらされたともみることができます。

今後、POTEKA地上稠密観測網が各地へさらに普及すれば、きめ細かな風向・風速データの解析を通して、JPCZのような局地的な気圧のトラフであっても、豪雪が発生しやすい地域をより正確に見極められる可能性が広がります。